



「戦闘機」に狙われたときには、
生きた心地がしませんでした。

大阪市内の都市部は空襲で危険なため、
奈良県に集団疎開していた吉村さん。
しかし疎開先も決して安全ではありませんでした。

よしむら こういち
吉村 公一さん (当時 9 才)

お腹いっぱい食べるのが夢

わたしが深江小学校 (当時は深江国民学校) に通っていた9才のころ、奈良県の香久山のふもとにある法然寺というお寺へ学童疎開しました。香久山は大和三山の1つで、今の橿原市にあたる場所です。お寺にある分教場という建物には、2つの部屋があり、1つは教室として使用し、もう1つは食堂として使用しました。



「学童集団疎開出発式 (深江小学校)」

食料が不足している時代のため、配給されるお米だけでは足りず、先生方が食料の買い出しに出ていました。朝は「おかゆ」、昼・夜は「すいとん」や「ぞうすい」などの団子汁を食べて生活をしていました。お腹いっぱい食べるということが不可能な状況でした。味がおいしい・まずいよりも、毎日お腹いっぱい食べたいという気持ちが強くありました。

村の端で乳牛を飼育しているところがあり、そこへ交代で当番を決め牛乳を取りに行っていました。牛乳も立派な栄養源でしたが、それでもみんなやせていました。

教科書がない中、工夫して学ぶ

戦争が激しくなり、教科書の印刷が行えず、わたしたちの教科書はありませんでした。そのため、進級する学年の上級生たちが使用していた教科書をゆずり受けて勉強していました。それでも、全員に教科書が行き

わたるわけではなかったため、先生方はとても苦労されたと思います。

疎開先にオルガンが1つあり、音楽はそのオルガンを使用していました。先生がオルガンをひき、わたしたちはその音に合わせて歌います。特に多く歌ったのが「春の小川」でした。

つらいだけではなかった疎開生活

6月に田植えが行われ稲が育つと、イナゴがたくさん発生します。何度も友達とイナゴを捕りに行きました。イナゴを捕まえては糸針に刺し、それをぶら下げて持って帰りました。持って帰ったイナゴはしょうゆをつけて焼き、おやつに食べていました。

他には、友達と山にセミ捕りに行っていました。香久山には「春蝉」というセミがおり、夏は夏のセミが鳴きますが、「春蝉」は4~5月にかけて鳴いていました。そのため、今と比べると少し長い間セミ捕りを楽しむことができました。

自然の多い土地だったため蛍を見ることもできました。お寺の周りに小川が流れていて、6月の田植えの時期にはたくさんの蛍が飛びかいます。日が暮れると児童はみんな外へ出て蛍を見に行きます。ヘビなどの危険な生物もいるため、先生からは「あんまり川の中に入らないように」と注意されていました。

今のようにテレビゲームなどの遊びはありませんで

したが、たくさんの自然に囲まれた環境でわたしたちは遊びを見つけていました。食べるものがあれば、そして家族にさえ会えれば、素晴らしい場所だったと思います。

疎開先は必ずしも安全ではない

疎開していることで必ずしも安全というわけではありませんでした。アメリカの航空母艦が戦闘機を積んで日本の近くにきていました。奈良県にも戦闘機が飛んできて、住民を機関銃で攻撃してきました。農家の方は夏には白いシャツを着て田んぼへ行かれますが、その白いシャツを目掛けて機関銃を撃ってくるのです。戦闘機が飛んで来たら、みんな白いシャツを脱ぎ捨てて遠くに放ります。シャツを放った反対側へ伏せると、戦闘機は白いシャツの方を人間だと思って攻撃します。戦闘機がいなくなったら農家の方がシャツを見ると、撃たれた穴が開いていたということがありました。そのままシャツを着ていたら確実に撃たれていたと思います。

わたしたちが生活しているお寺にも戦闘機はやってきました。お寺の本堂の裏にある建物は部屋が4つに分かれており、各部屋ごとに寝る場所が決まっていました。夏なので開けっ放しにして、池のある大きなお庭で遊んでいました。そこへ戦闘機が飛んで来て、機関銃を撃ってきました。「これは危ない!」と急いでみんな部屋のすみへ固まりました。戦闘機からは子



「深江小学校の児童たち」(左) 「疎開時の吉村さん」(右) 提供: 吉村公一さん

